

朝日歌壇俳壇



＜日曜日のプローチ 18＞ junaida

うたをよむ 戦渦の光

市村 栄理

間もなく戦後80年の終戦忌だが、世界では人間の愚行である戦争が絶えない。学兵汝吾が仰ぎ目に息白き冬日見詰めて涙を支ふ下瞰中村草田男、昭和19年の作。戦況が困難を極め、成蹊高校の教え子をついに戦場に送り出すことになった際の句だ。戦地に征く学生の涙をためる姿をありのままに表現。出征を運命として受け入れる学徒の辛さに寄り添い、見守る教師の情が伝わってくる。国家総動員法の下、自由主義者と見なされ圧力を受ける中、ぎりぎり許された表現であった。勇氣こそ地の塩なれや梅真白出陣近き教え子に示した同年の句。「地の塩」とは聖書マタイ伝に載る語。塩は防腐剤として人の世の腐敗墮落を防ぐものという比喩に託し、戦渦でも自暴自棄にならず、勇氣・氣力を持つて生きよという意を暗黙裡に込めている。寒さの中で、春を告げる白梅の凜とした姿は、困難の中でも生きる光明である。樽とを願ひ俳人は詠み続けるのだ。(俳人)

◆8月17日の歌壇俳壇面は休載します。

第45回現代俳句評論賞 現代俳句協会主催。山形市の元木幸一さん(75)の「俳句になったデューラー 一中村草田男作『騎士』の新解釈」に決まった。北大路翼著「給食のをばさん」 小学校の給食従事者になった俳人による俳句日記。「一口の梨を千人分作る」(角川書店・1980円)

風信

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があり。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

高野公彦選

そうだった今日という日は人生で一番老いて一番若い (亀岡市) 俣野 右内
ペンギンとゴリラ歩きを言いあって八十代が笑って元気 (高槻市) 田中由紀子
人相の違いにまどう目の前の候補者の貌ボスターの顔 (仙台市) 沼沢 修
強引に袖ひきシルバー席ゆるる年嵩われと変わらぬ古老が (吹田市) 鈴木 基充
時を戻す魔法はやっぱり笑顔だね疎遠の友との待ち合わせで知る (東京都) 上田 結香
ポストまで歌投函の二十分が夫の介護の息抜き刻 (下野市) 若島 安子
14年経てようやく草刈りのでし学校福島にあり (京田辺市) 大島 智雄
宅地化の進むこの丘その昔し座流星群を観たよね (船橋市) 梅本 咲子
☆養蚕を継がざりしわれに遺されて広き畑はコスモスの花 (安中市) 岡本千恵子
次の青待ちて渡るをならひとす置いてけぼり (横浜市) 丸岡 良雄

【評】1 首目、過去から見ると今日の自分は一番老いており、未来から見ると一番若い、という捉え方の面白さ。7月13日付掲載の久保塚文子さんの作に応えた歌か。2 首目、お互いのペンギン歩きとゴリラ歩きを言い合って笑う元気な八十代。

永田和宏選

真夏日もヒジャブまといて工場へ急ぐ女性の深き眼差し (西条市) 村上 敏之
解体の現場に異国の言葉聞く妻も母もいるひとびとの (東京都) 西出 和代
蓼科は女山と呼ばれ八ヶ岳山に列し頂丸 (東京都) 松本 長勝
母という役目を終えたかあさんの「特売」の文字残る家計簿 (寝屋川市) 今西 富幸
咎めれば「また叱られた」と正の字をこみよがしに書いていた母 (中津市) 瀬口 美子
茄子に「び」をつけて言ふ日のわが心いささか西にかたよりてあり (東金市) 山本 寒苦
お互いに「あなたがいないかったら」と我が身は残るつもり (江別市) 長橋 敦
減反をすれば補助金くれし国米騒動の始まりはここ (前橋市) 荻原 葉月
連休中重い新聞載せ走るギアを上げれば前輪が浮く (甲州市) 麻生 孝
島中が鮎鮎仕込む土用中真露を冷やす長命寺 (津市) 中山 道治

【評】米でも日本でもフナー・ストという語が声高に叫ばれ始めているが、一、二首目のような人々がいることを大切に考えたい。差別や排除ではなく、共助、共存こそを大切に。十首目、私も湖北出身だが、地元産の鮎鮎の強烈な匂いが懐かしい。

川野里子選

貴景勝の着るるみをいま脱いだのか湊川親方は少年のよう (名古屋市) 植田 和子
八十歳過ぎ父の死に場所判りたりマリアナにあらす比島マリキナ (大分市) 児玉 直
獣医師は噛まれるのが仕事だとやぎ病院のやぎ先生笑む (日南市) 宮田 隆雄
伐られかけ見捨てられたる二十年 神となりたり縄文杉は (仙台市) 沼沢 修
ぬいぐるみ千体生みし指仏たいそう褒められて骨壺へ (鎌ヶ谷市) 夕 菅 女
サバンの獣さながら距離を置き木陰ではじめるラジオ体操 (札幌市) 田巻 成男
反抗期のおいがする共通外接線こいつは仲間の気配 (奈良市) 山添 葵
むしゃむしゃとキャベツ喰いたい時がある羽化が近いな退職間近 (西宮市) 市橋 昌己
炎天を赤鬼の如き顔をして一票投げ帰てきたり (八王子市) 額田 浩文
参院選のボスターだけが笑ってる何かいいことでもありました? (神戸市) 澤田 効

【評】一首目、闘士から親方への表情の変化がまことに新鮮。二首目、比島マリキナ、この地名だけが形見だ。父を思い続けた時間が重い。三首目、こんな先生なら診られてみたい。七首目、初めて知った数学用語を使ってみたい反抗期だぜ。

佐佐木幸綱選

いつか子の地元になる町よろしくと手を二度叩く七夕音頭 (平塚市) 小松百合華
A Iに思考機会を奪われて「考える草」でなくなる人間 (福島市) 安斎真貴子
鮎釣りを教えてくれし級友も近きだんだん遠のくふるさと熊野 (東大阪市) 池田 健一
☆養蚕を継がざりしわれに遺されて広き畑はコスモスの花 (安中市) 岡本千恵子
食草のムラサキケマンを庭に置きウスバシロチョウまた来るを待つ (盛岡市) 渡辺 恭
暗闇に忍びの如く紛れ込み覆面パトカー右折車待つ (京都府) 片山 正寛
お隣にアライグマ来て大騒ぎ森と続きの街はにぎやか (横浜市) 白川 修
アメンボは華麗なステップ踏みながら筋連に行く桂馬のごとし (つくば市) 小林 浦波
目頭をそとと押さえて席を立つ井上ひさしの反戦の劇 (三鷹市) 大谷トミ子
早朝に老いの電動自転車剣道部員が追ひ越して行く (香取市) 嶋田 武夫

【評】第一首、結婚して新しい土地に引っ越した若いお母さんの一首。盆踊りを踊る場面をうたう下句、うまい。第二首、近年の何でもA Iまかせの風潮を皮肉って、するどい。第三首、いっそう深まる故郷への思慕が読める。